

IEC 規格作成委員会の回顧。

今井 孝二（豊田工業大学 名誉教授）

1972年に当時のユーゴスラヴィアのリュブリアーナで開催された IEC SC22F の規格作成のための第1回委員会に、小生は東芝から派遣されて出席した。会議室はかなり広かった。小生がたまたま一番早く会議室に入ったが、間もなく General Electric Company. USA の Chairman Dr. Ellert が入室され、その後次々にメンバーが集合した。

この委員会では半導体デバイスのサイリスタを使用した直流送電用変換装置の規格を作成することが目的になった。後に、この規格の範囲はさらに広げられて、SVC (Static Var Compensator) にも適用することになるであろうとのことであった。

1972年にすべてを議論するだけの時間はなかったため、1973年にミュンヘン(ドイツ)、1978年にワルシャワ(ポーランド)、さらに1982年にも東京で開催された。

SC22F では1973年当時からほかの半導体変換装置に関する IEC 規格作成も種々議論された。SC22F の委員会すべてに出席するには小生の時間的余裕がなかったため、この規格の判然とした最終段階の記憶は定かではない。確認したところ、1981年になって IEC 700 (現 IEC 60700-1 : 1998) として発行されていた。

SC22F では、その後範囲を広げて、現在 VSC (電圧源変換装置) なども新しい提案がなされている。

一方、SC22B 規格作成では、フランス Schneider 社の Mr. Drouin が Chairman として誠にもの静かな紳士であった。当時の SC22B の原案作成時点では、パソコンは普及されてはいなかったので、小生は旧式の英文タイプライタを使用することになった。原案のコメントを何回も Mr. Drouin に送付していたが、「たいへんありがたい。」との賛辞を送っていただけしたのは、誠にありがたく今でも深く感謝している。さらに、たまたま、小生が別室で SC22F 委員会に出席していたとき、SC22B に出席されておられた池田先生から Mr. Drouin が小生を評価されていたことをお伺いし誠に幸いであったことを記憶している。

SC22B で作成した IEC 60146-1-1 (1991-03) 及び IEC 60146-1-2 (1991-03) の Third edition を繰り返し読むたびに両者が他励変換装置についての優れた文献であるといったといった感情に駆られるのである。

1987年以降は、多くの別件のため、IEC 会議に出席する機会はなくなったが、JEC の関係で、国内で SC22F, SC22H 会議の委員として会議にできるだけ出席している。現在、小生の部屋にはメールで配付された多くの IEC 文書があり、多分既に 5,000 枚以上の文献保管場所になっている。参考になりそうもないと思われるものもあるが、優秀な IEC 資料が非常に役立つことに気付き、今後もよく検討したいと考えている。

以上